《論文》

帝国、連帯、交差性：
石垣綾子のトランスナショナルな思想史

松　坂　裕　晃*

Empire, Solidarity, Intersectionality:
Ishigaki Ayako's Transnational Intellectual History

Hiroaki MATSUSAKA

Feminist intellectual Ishigaki Ayako 石垣綾子（1903–96）was widely known in postwar Japan as a prolific author and television celebrity. This article traces her lesser-known early activism across Tokyo, New York, and Los Angeles, where she published a number of Japanese and English writings that documented immigrant life and criticized Japanese militarism. This article first uncovers her essays from the mid-1920s when she started to write in Tokyo and continued in New York. Drawing on the theories of the socialist feminist Yamakawa Kikue 山川菊栄 but also exploring her own style, Ishigaki wrote about gender, labor, and American capitalist culture. Next, the article analyzes Ishigaki's practice in early-1930s New York. As the Japanese invasion of China accelerated, Ishigaki increasingly emphasized a class analysis and politics of solidarity with the Chinese. The article concludes by investigating Ishigaki's essays in *The Rafu Shimpo* 羅府新報, a major Japanese newspaper in Los Angeles. During her six-month tenure as a reporter for the newspaper in 1937, she not only argued for an antiwar feminist coalition but developed an immigrant nationalism that drew partially from the discourse of Japanese imperialism. Pointing to such a contradiction between pacificism and imperial ideas is vital for understanding Asian migrants' intersectional experiences and cross-imperial politics.

キーワード：アジア系アメリカ、帝国日本、交差性、国際連帯、移民ナショナリズム
Keywords: Asian America, imperial Japan, intersectionality, international solidarity, immigrant nationalism

---

* 立命館大学国際関係学部准教授
hmatsu@fc.ritsumei.ac.jp
Received on 2023/11/29, accepted after peer reviews on 2024/5/7

© 立命館大学アジア・日本研究所
『立命館アジア・日本研究学術年報』2024, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.5, pp.1-23.

I. はじめに

石垣綾子は、20世紀後半の東京を拠点に評論家として活躍した人物である。石垣は1903年に東京で生まれ、羽仁もと子・吉一夫妻が設立した自由学園高等科を卒業する。1926年に留学のため渡米し、1930年代にニューヨークを中心として反戦運動家・文筆家として活動した。太平洋戦争中にはワシントンDCに本部が設置された戦時情報局にて対日宣伝活動に協力する。赤狩りの影響で1951年に帰国したあとは、知米派・進歩派の知識人として論壇やテレビなどのメディアで活躍した（Lin and Robinson, 2004; Robinson, 2016: 17–20; Matsusaka, 2019: 92–94, 182–226; 井原, 2013）。彼女の名を一躍広めたのは、1955年に『婦人公論』上で繰り広げられたいわゆる主婦論争だった（堀, 1995; 村上, 2006; 妙木, 2009; Bardsley, 2014: 44–73）。石垣は1996年に亡くなるまで、アメリカ体験や女性としての生き方などをテーマにした多くの本や発言で知られた。

石垣綾子には著作が多く同時代的な知名度があったが、彼女に関する本格的な研究は少ない。他方で彼女が渡米後に知り合い、1929年にニューヨークで結婚した画家の石垣栄太郎はほぼ無名だったが、死後に綾子の紹介もあって知られるようになり、美術史やアジア系アメリカ研究において取り上げられてきた（Wang, 2017: 38–67; 奥村, 2013）。綾子のテクストは、栄太郎を研究する際の資料として参照されることは多いが、それ自体が分析対象になってこなかったきらいがある。たしかに石垣綾子は難しい研究対象ではある。その活動が東京、ニューヨーク、ロサンゼルスなどで展開したため、史料が日米の各所に散らばっている。90年代まで生きたため歴史研究の対象として認識されづらいし、既存のディシプリンの研究対象になりやすい「理論家」や「文学者」でもない。ただ何よりも、アメリカと日本で相当広く同時代的に認知された彼女があまり研究されてこなかったことは、移民研究や社会運動史、思想史などが長きにわたって男性中心的に展開してきた（Gabaccia and Ruiz, 2006: 3; 山田, 2011: 106–107）ことと無関係ではないだろう。

ところで、石垣綾子はアメリカに20年以上住んだが、想定外の形であれ日本に戻ったという点で、移住先への定住や帰化を念頭に置いた狭義の、ないし旧来の想定での「移民」ではない。むしろ、移住者や「再移民（remigrants）」（東, 2022: 4）を含む広義の「移民」として捉えることができる。彼女の歴史的経験を考察するにあたっては、日系移民と日本のアジア太平洋地域での植民地主義との強い結びつきを論じてきた東栄一郎が提起するように、移民前、移民後という連続／断絶する経験を、それぞれつなぎ合わせてゆくアプローチが有用である（東, 2022）。いうまでもなく日系移民は、アメリカにおいては人種・民族的マイノリティであり、太平洋戦争中の強制収容などの厳しい被差別体験をもつ。しかし植民地帝国日本の人種・民族的秩序に照らすと、日系移民は自らの「出身国」ないし「本国」である帝国の外にいるとはいえ、その支配的「マジョリティ」としての立場性を有しており、植民地出身者とは全く状況が異なっていた。本論文では、アメリカにおいてアジア系女性の平和運動家として活動した石垣綾子の経験や思想から、この入り組んだ立場性をどのように読み取ることができるのか、検討してゆく。

このような石垣綾子の事例は、近年新しい展開を見せてきたアジア系アメリカ研究やトランスパシフィック研究に重要な示唆を与える。それらの研究領域は、環太平洋圏における諸思想のトランスナショナルな問題設定や発展形式、交流などを明らかにしてきた。特に重視されてきたことの一つは、アメリカや日本の「帝国」的なあり方とアジア系移民・アジア系アメリカ人の経験の関連性である（東, 2014; Yoneyama, 2016; So, 2016; Takeuchi-Demirci, 2018）。さらに、思想史研究者のア

ウグスト・エスピリトゥは、アジア系アメリカ史が複数の帝国――アメリカや日本はもちろん、ヨーロッパやソ連、中国も含む――の動態の中で展開してきたあり方を「間－帝国的（inter-imperial）」と概念化している（A. Espiritu, 2014）。ただし、石垣のように日本／東アジアとアメリカ、さらにアメリカ国内を移動・移住した女性知識人が、その経路において人脈を広げ、表現のチャネルを間－帝国的に多様化させながら言語圏や国境を横断する言論活動を行った事例については研究が少ない[1]。石垣の越境的な思想表現や実践の展開は、移動・移住経験と思想的発展の関連性を間－帝国という文脈で検討する素材になる。彼女の事例は、日本そしてアメリカという帝国における人種・民族関係やジェンダーの権力構造を、移民経験と越境的思想・運動という「外延」から照射するだろう。

これに加えて石垣の事例に関する分析は、近年様々な研究分野で深化してきた「交差性（インターセクショナリティ）」の議論に資する。「交差性」は、1980 年代末にアメリカのブラック・フェミニズムや批判的人種理論の文脈で提示された、人種やジェンダーなどの複数の社会的抑圧やそれに伴う経験の交わりを示す概念である（コリンズ・ビルゲ, 2021; 清水, 2021）[2]。本論文との関連では、重要な点が二つ挙げられる。第一に、「交差性」はもともと「人種的マイノリティ」かつ「女性」という周縁的な経験に根差した形で提起されたが、翻って、彼女たちの経験と表裏一体のものとしての「人種・民族的マジョリティ女性」や「人種・民族的マジョリティ男性」といった特権性を含むカテゴリーの分析においても有効な視角とされてきた（Byrne, 2006; Norocel, 2013; コリンズ, 2024: 42）。これと類似する形で日本語圏では、交差性の概念が現在のように広く紹介される前から、例えば社会学者の鄭暎惠が、ブラック・フェミニズムの視角を批判的に引き継ぎつつ、アメリカにおける白人や日本における日本人を明示的に、ないし無意識的に中心化する「フェミニズムのなかのレイシズム」を批判していた（鄭, 2003: 44–70; 鄭・岡, 1995）。それに目を配りつつ、最近では文化人類学者の石原真衣も、日本人フェミニストが日本の人種・民族的マジョリティとしてもつ「「白人」的特権性」を指摘している（石原・下地, 2022: 12–13）。

本論文では、こうした問題設定を引き継ぎながら石垣綾子の思想を検討する。交差性研究においては、国内的な枠組みが設定されることが多く、石垣のように国境を越えて移動する主体の経験を線で捉えてゆくような視点が欠けがちである[3]。しかし、石垣がマジョリティ女性とマイノリティ女性という立場を重層的に有したのは、二つの帝国をまたぐ経験をして、それが折り重なる地点で――すなわち、間－帝国的に――行動したからである。侵略の度合いを強める帝国日本の磁場の周縁であり、かつイデオロギー的な前線という側面もあったアメリカの日系移民世界において（東, 2022: 19–31）、移動経験という要素を勘案すると、彼女の交差的な思想や行動の展開をどのように

---

[1] 日本語圏では「間－帝国」を “trans-imperial” の訳語として採用する向きがある（水谷, 2018; 山田, 2020）。しかし “trans-imperial” が、「「あいだ」における相互作用のみならず、そうした相互作用を媒介にして帝国とそれを構成する人々がいかに変容していくかに注目する」（水谷, 2018: 220）概念であるならば、“inter-imperial” を「間－帝国」と訳し、“trans-imperial” は例えば「貫－帝国」と訳すべきであると考えられる。エスピリテゥ（A. Espiritu, 2014）の「間－帝国」の枠組みは、帝国間の関係がアジア系アメリカに与える影響に着目しているという点では「貫－帝国」的な視点も有しているが、逆に、アジア系アメリカからの帝国への影響はそこまで重視していないといえる。

[2] 「交差性」について日本語で読める文献としては、ほかに、『現代思想』2022 年 5 月号特集「インターセクショナリティ」や、コリンズ（2024）がある。

[3] 例えば、コリンズ（2024）においても移動する主体にほとんど注意が払われていない。

解釈できるだろうか。帝国日本の文脈では人種・民族的マジョリティの女性であったが、アメリカではアジア系女性としても社会運動に身を投じた石垣綾子の間－帝国的な思想や行動において、社会的な特権性と周縁性の交差はどのように見られるのだろうか。

以下では、かかる問題意識の下で石垣綾子の両大戦間期の思想や行動を跡づける。第一に、彼女の「初期」、すなわち1920年代の活動を検討する。この時期石垣は、大正デモクラシー下の東京で拡大しつつあった社会主義フェミニズム運動に参加し、運動や執筆を開始する。第二に、石垣が運動家として離陸してゆく1930年代前半のニューヨークでの活動を論じる。彼女はグリニッジヴィレッジ周辺の社会主義者たちと共闘しながら、東京の雑誌にアメリカの社会運動をレポートする記事を寄せていた。大恐慌期に彼女は、その生涯の思想的変遷において最も「階級」的分析を強調した。日本が中国侵略を強めてゆく中で、石垣は英語での反戦運動や著述も精力的に行うようになる。第三に、石垣が1937年にロサンゼルスの『羅府新報』の客員記者として連載した記事を分析する。『羅府新報』は、現存する最古の日系アメリカ新聞であり、カリフォルニア南部の日系社会の中心的なメディアである（Hayashi, 1997; Wald, 2016: 75–101）。石垣の『羅府新報』の仕事については、彼女自身も回想録で言及し、先行研究も触れてはいるが（Lin and Robinson, 2004: 259–260; Hayashi, 1997: 100–101）、管見の限り内容が詳細に検討されたことはない。本論文では、石垣のジェンダーや国際連帯についての議論を中心に分析し、その意義や限界を日本の帝国主義との関連において解釈する。彼女はニューヨークでの多民族的な社会運動圏にて英語で発信していた状況を離れ、ロサンゼルスの日系移民コミュニティにおいて日本語での言論活動を行った。これを契機に彼女は、反ファシズム的な思想や実践を継続するだけでなく、帝国日本のイデオロギーと連続する移民ナショナリズムも表現するようになった。このように本論文では石垣の言論と足取りを追跡し、彼女がその移動経験の中で紡ぎ出した思想の変遷を、同時代の「間－帝国的」な文脈に織り込む形で描いてゆきたい。

II. 初期の活動：越境する社会主義フェミニズム

石垣綾子が社会問題への意識を本格化させたのは1920年前後だと考えられる。彼女の回想によれば、東京府立第一高等女学校時代に進歩的な英語教員が、女性参政権運動や、三一運動などの朝鮮植民地独立運動、世界的に広がっていた「民族自決」概念について授業で扱ったことが、彼女が政治的関心や国際連帯の意識をもつきっかけになった（石垣, 1960: 82–86; 1991: 44–45）。自由学園高等科在籍中から言論活動も開始する。先行研究には、石垣自身の記述に基づいて、彼女と自由学園創始者・校長であった羽仁もと子との思想的対立を指摘するものもある（斉藤, 1988: 159–160）。しかし石垣は、羽仁が編集長を務めていた『婦人之友』に渡米前だけでなく1926年の渡米後も寄稿していたことから、羽仁ら『婦人之友』同人と関係を保っていたことが窺える。石垣は1927年に、女性運動家の奥むめおが主催していた『婦人運動』にも寄稿している。石垣はもともと東京で、奥が立ち上げていた『婦人運動』の前身『婦人と労働』の編集を手伝っていたため、渡米後も奥らとの交流を継続して『婦人運動』への寄稿に至ったとみられる（石垣, 1927a; 1983: 13–15; 1991: 76–78）[4]。

[4] 本論文が分析対象とする史料には、石垣が旧姓の「田中」や「Haru Matsui」「田中メイ」の筆名を用いたものもあるが、本論文の叙述には広く知られている「石垣綾子」を主に使用する。引用にあたっては、読みやすさや表記統一のため引用元の仮名遣いや送り仮名、句読点などを修正したり、フリガナを省略したりした箇所がある。ま

石垣の1920年代の論考から、以下のことがいえる。第一に、石垣は東京にて山川菊栄への私淑や島野初子との出会い、国際婦人デー運動への参加などを通じて、社会主義フェミニズムの思想を摂取し、それをもとに女性史や女性運動、ジェンダーについて思索を深めた（石垣, 1983: 5–16; 1972）[5]。これが典型的に表れているのが、「婦人と奴隷制度」という文章である。この論考は、石垣が当時英文科聴講生として通っていた早稲田大学で男子学生に「女性の立場から」の執筆を依頼されたものである（石垣, 1983: 55–56）[6]。そこで彼女は、女性が家庭の外で労働力として動員されるようになった近代資本主義社会において、女性たちは以前よりも社会と接触をもつようになり「家族制度の崩壊」や女性の自立的意識の高まりが促されるとした。同時に石垣は、支配層が女性の社会進出を背景として自らに従属する労働者や女性をつくり出すために女子教育を行っていると批判した。そのような女子教育を正当化するイデオロギーとして彼女が批判したのが、女性の母性を礼賛するいわゆる「母性の神聖」論であった（石垣, 1924）。この議論は、二か月先だって出版された山川菊栄の論考「「労働神聖」と「母性礼賛」」と内容的に重複するところが多く、石垣本人も自らの文章を「当時崇拝してやまなかった山川菊栄ばりの論文調でまとめあげた」と述べている（石垣, 1983: 55）[7]。また石垣は自由学園卒業後、仕事がなく、図書館に通って山川の評論集など社会主義関連の文献を熱心に読んでいたとも回想している（石垣, 1991: 56）。石垣は上の世代の論客であり憧れでもあった山川の議論を参照し、それに類似した議論を展開したといえる（Matsusaka, 2019: 93）。石垣は、きわめて男性中心的であった1920年代中盤の早稲田大学という空間[8]において、粗削りではありながらも、資本主義分析とジェンダー分析を組み合わせた社会主義フェミニズムの枠組みを提起した[9]。

第二に石垣は、エッセイ風の記事で、アメリカ社会の資本主義文化に対する批評をジェンダーや消費社会などの角度から行った。そこでは、前述のような階級分析の枠組みが前面に出されるのではなく、自らの経験を交えた平易な叙述が中心になっており、彼女の戦後の評論における文体との連続性が見られる。近代資本主義文化に対する批判的な問題意識は、渡米後に『婦人之友』に掲載された三つの記事、「自動車文化」「アメリカのジャーナリズム」「アメリカの子供「ジム」」に顕在している。1920年代後半という時期は、日本の論壇でいわゆるアメリカニズムについての議論が盛んになる時期である（ハルトゥーニアン, 2007: 106–109）。『婦人之友』にもアメリカ文化に関する記事が定期的に掲載されており、編集者や読者の関心の高さが窺える。同誌は、明治末期から隆盛した「家庭ジャーナリズム」を担った雑誌のひとつである（牟田, 1996: 157）。石垣は一連の論考で、女性解放や家庭生活の模範を示唆するものとしてアメリカ文化を日本の読者に伝えつつ、東京で得た社会主義フェミニズムの枠組みを役立てながら、アメリカや日本の資本主義や帝国主義への批判的な視座をテクストに潜ませた。例えば、郊外の家庭の6歳の息子「ジム」との交流を描いた文章で石垣は、日本においてはアメリカよりも男性が女性に対して傍若無人に、そして抑圧的・暴力的

た、史料中に現代では差別用語や不適切な語として認識されている言葉があるが、当時の歴史的状況を明らかにするためにそのまま引用する。

5 石垣周辺の運動に関する島野の証言として、牧瀬（1967）。

6 石垣の早稲田大学での活動については、石垣（1980: 151–152）。

7 なお、石垣はこの論考の題名が「女は弱きにあらず、強し」だったと述べているが（石垣, 1983: 55）、実際には「婦人と奴隷制度」だった。

8 早稲田大学が初の女子学生を正式に受け入れたのは1939年だった。女子聴講生も1920年代から学んでいたが、石垣は学生のほとんどが男子だったと回想する（早稲田大学大学史編集所, 1987: 791–805; 石垣, 1983: 55）。

9 石垣の他の社会主義フェミニスト的な論考については、石垣（1928）、Matsusaka（2019: 186–187）。

にふるまうことがより許容されていると論じる（石垣, 1927b: 211–212）。その議論において彼女は、「少しばかりアメリカ人の方が文明人なのかもしれぬ」と述べることにより、同時代の知識人たちのようにアメリカの「文明」的なありかたを参照し、社会・文化の「モデル」に設定しつつ、ジェンダー分析を提示している（石垣, 1927b: 212; 亀井, 1977: 23）[10]。ただし石垣が特異なのは、「ジム」の「国旗が好きで戦争が好きで、どんな場合にもアメリカが勝ったことをよろこ」ぶ言動に、アメリカ社会の草の根レベルにおける帝国主義を指摘する点である。

> こんな子供らが道端で戦争ごっこをしている間はアメリカも日本も帝国主義を完全に押したてておくこともできるだろう。〔……〕あんなに鳥を愛し、動物を愛しているジムをみると抱きしめてやりたいほどの可愛さを感じるが、アメリカ万歳の戦争ごっこをしているのを見ると単純な子供の頭にこんな思想を植えつけた社会を恨みたくなる。（石垣, 1927b: 212）

石垣は、「帝国主義や、資本主義のボロがだんだん引きずり出されつつある」「ジムも願わくはそのボロを引き出す一人になってほしい」と期待をかけるが、「ああして国旗を振り回している姿を窓の前に見ていては何ともいえることではない」とする（同上）。当時、日本からアメリカに留学生や移民として渡った者の中には、白人の家庭に住み込み、あるいは通って働く「スクールボーイ」「スクールガール」が多かった（Ichioka, 1988: 22–28）。石垣も「ケリー」という名のアイルランド系牧師の「スクールガール」として生活していたと回想しており、「ジム」はその家庭の息子だった可能性がある（石垣, 1957: 33–35）。「ジム」との交流を素材に日米のジェンダー規範の異なりや帝国主義イデオロギーの大衆への浸透を見出す石垣の語りは、それまでの彼女の社会主義フェミニズムの枠組みに「帝国」や「ナショナリズム」といった要素が付け加わり始める過程を示している。

III. 1930年代前半のニューヨークでの活動

1930年代前半の石垣綾子の言論・政治活動は、20年代にも増して社会主義に舵を切る。とりわけ彼女は、共産主義作家マイケル・ゴールドなどニューヨークの左派言論人や活動家とのつながりを広げながら、国際連帯や反戦を強く主張した。石垣は、1931年秋の満州事変のあと初めて反戦運動に加わるようになったとしている（石垣, 1967: 71; 1987: 95–97）。たしかにその時期ニューヨークでは、中国系コミュニティで抗議運動が起きていた（*New York Times*, 1931a; 1931b）。中国に滞在していたジャーナリストのエドガー・スノーによるルポルタージュや、後述するパール・バックの小説などを通じて、中国関連の作品もアメリカで広く認知されていた（Leong, 2005）[11]。また石垣の活動の背景には、流産と出産直後の子供の夭逝という、自身に相次いだ悲劇的な経験もあった。この体験によって彼女は、若い青年が戦場で命を落とす悲惨さに大きな関心をもち、日本の帝国主義、特に中国大陸への軍事進出に反対する運動により積極的に関わるようになった（石垣, 1987: 90–94; 1991: 130–134; Matsusaka, 2019: 202）。

石垣は中国人留学生やヨーロッパ系移民の進歩派知識人らによって結成された「中国友の会

[10] 明治期の日本の言論において、とりわけ新しい男女関係や家族観を論ずる際に「西欧文化」が頻繁に引き合いに出されたが（牟田, 1996: 57–59, 70–72, 124–130）、石垣の議論の枠組みにはそれとの連続性も見られる。

[11] 石垣のスノーやバック、アグネス・スメドレーとの交流については、石垣（1983）。

（American Friends of the Chinese People）」に参加し、1930 年代後半にかけて団体の機関紙『今日の中国』（*China Today*）に日本で抑圧されている労働者との連帯などを呼びかける寄稿を行った[12]。彼女は Haru Matsui という名前で執筆に加えて講演活動も行うようになり、30 年代中盤までに主な言論・政治活動の言語は日本語から英語に変わった（石垣, 1991: 140）[13]。

前述のように、石垣は 20 年代から既に社会主義フェミニズムを下敷きにして家父長制や資本主義に対する批判を行い、帝国主義についての議論も始めていた。つまり 30 年代の言論家・運動家としての飛躍は、20 年代の東京で培った思想や評論の視点をニューヨークへの越境・移動・定住、さらに当地での運動参加の経験を経て昇華させたものといえる（松坂, 2018: 5）。彼女は、大恐慌下のアメリカで拡大していた社会主義運動に自ら参加しつつ、ルポルタージュの形で日本の読者にその様子を伝えた。これにより彼女は、日本の読者に対してグローバルな社会運動の展開の共時的な感覚を与えるとともに、日本で当局の弾圧を受けながらも再編成されつつあった社会主義文化運動に、いわばニューヨークから言説的に参加した。例えば石垣は、『女人芸術』に「ジョン・リードの死を記念する」を寄稿し、1931 年 10 月にニューヨークのウェブスター・ホールで開催された集会の模様を描いている。オレゴン州出身のリードはロシア革命後にソ連に移住し、1920 年にモスクワで病のため 30 年余りの生涯を終えた活動家・ジャーナリストである（Spence, 2014）。彼はアメリカの社会主義者の間で広く支持され、彼にちなんで名づけられた芸術家・作家のネットワーク「ジョン・リード・クラブ」も、ニューヨークでゴールドやウィリアム・グロッパー、石垣栄太郎らによって結成され、全国に拡大しつつあった（Sloan, 2004）。リードは日本でも 1920 年代までに短い翻訳の出版も含めて何度か紹介されていたが（リード, 1922a; 1922b; 1928）、石垣綾子の記事はリードの生涯を紹介しつつ、それを祝する集会の模様を伝えており、ジョン・リード・クラブや当時のニューヨークの社会主義運動・文化を記録している。しかし石垣は、リードやアメリカの社会運動の単純な紹介にとどまることなく、日米の社会主義運動の展開やそれへの弾圧を比較してみせる。

> 会場には、××〔日本？〕のように、サーベルをガチガチやって、妨害する巡査もなければ顎鬚が、「中止！」と、ドラ声を張りあげることもない。しかし、この事は、アメリカのブルジョアジーと、その手先の××〔官憲？〕が、労働運動を是認したり、もしくは、それを大目に見るという寛大さを示しているのでは、絶対にないのだ。その反対に、彼らがいかに悪辣な手段で、各地にまき起こされているストライキを暴圧し、餓死に直面している争議団員に横暴を加えつつあるかということを、大衆の目から被い隠そうとする、巧妙なやり口なのだ。（石垣, 1932a: 25）

石垣は、アメリカにおいて社会・文化運動に対する弾圧は多く存在するが、日本のような明示的・包括的なものは比較的少ないために見えづらくなっているとした。石垣は、「アメリカのブルジョアジー」が、「言論や出版に対しては放任主義であるかのようにみせかけ」つつ、水面下で「ブルジョア文化のあらゆる機関を動員して、反動思想の鼓吹」に余念がないとする（石垣, 1932a: 26）。彼女

[12] 石垣は「中国友の会」設立が 1934 年だったと回想するが（石垣, 1987: 97）、先行研究は 1933 年としている（Lai, 2010: 95ff.; Matsusaka, 2019: 202）。石垣の『今日の中国』記事は、Ishigaki（1935; 1938）。

[13] 石垣が反ファシズム団体であった「戦争とファシズムに抗するアメリカ連盟」（American League against War and Fascism）の年次大会へ参加した記録も確認される（United Against Fascism and Peace［sic］, 1936）.

はこのようにアメリカにおける社会運動の弾圧の実状を詳(つまび)らかにすることで、以前言及することがあった文化的規範としてのアメリカとは異なるものを描く。彼女の新しい理解によれば、日本とアメリカは第一次大戦後や大恐慌下での社会的矛盾が噴出している点で同じであった。その矛盾の現れとしての社会運動への暴力がよりあからさまか、あるいはより懐柔的かという違いのみが、二つの「帝国」にはあるのであった[14]。

このように、石垣の批判は、日米での運動経験や活動家たちとの出会いを経ながら二つの帝国の権力構造について考察を深める「帝国横断的」なものであった（Matsusaka, 2022）。しかし、日米の社会主義運動やそれに対する弾圧の状況を強く意識した石垣の議論は、日系コミュニティを対象としたロサンゼルスでの記者経験を経て変化してゆく。この展開を次章で検討してみよう。

IV. 『羅府新報』勤務とロサンゼルス日系社会との出会い

1.「女性所感」の連載

石垣は1937年春から半年ほどロサンゼルスに滞在し、『羅府新報』の客員記者として勤務する。石垣は、このとき「平和民主同盟」のスティーブ・ハリマンという人物から依頼があったと回想しており、「アメリカ平和民主主義同盟（American League for Peace and Democracy）」を指していると考えられるが、詳細は不明でありさらなる検討が必要である（石垣, 1991: 150）[15]。

石垣の『羅府新報』の連載は、1937年4月7日から翌年1月22日まで、約150回にのぼった[16]。9月末まではリトルトーキョーから遠くないハリウッド地域に住み、実際に取材を行いながら、平日はほぼ毎日のように記事を連載した（石垣, 1991: 153–154）。その後10月8日までにニューヨークに戻り（羅府新報1937年9月29日、同30日）、10月、11月、翌年1月に計20回程度寄稿したことが確認できる。連載のタイトルははじめ「随感随想」だったが、10日ほどで「女性所感」に改められた（1937年4月16日）。ニューヨークから送られた記事には「グリニッジヴィレッジ」「紐育から」と題されたものもある（1937年10月16日、1938年1月12日）。

連載の内容は多岐にわたったが、何度か繰り返し扱われた主題がある。まず石垣の連載では、女性の地位やジェンダーが中心的な主題の一つであった。石垣の連載は、日系ロサンゼルスの男性中心的な言説世界で看過されがちだった家父長制や性差別の問題を提起した。例えば4月下旬の記事は、若い日系二世の世代が育ちつつある状況に焦点を当てている。「若い二世の方々を見ると輝かしい瞳、ふさふさとした黒髪に、たとえ身は労働服に包まれ、折り目のないよれよれズボンであろうとも、若葉を見るすがすがしさがある」と述べた記事は、二世の活躍を頼もしく描く半面、アメリ

---

[14]「帝国」としての日米の比較や交錯については、本論文の議論の範囲を超えるが、研究が増えつつある（Yoneyama, 2016; フジタニ, 2021）。

[15] ジャーナリスト大森実は、石垣のロサンゼルスでの活動にアメリカで活動していた野坂参三が関係していたと述べている。しかし大森の著書には、事実と異なると考えられる記述や証言（例えば、石垣がロサンゼルス滞在以前から「田中メイ」の筆名を用いていたこと、アメリカ共産党員であったこと）があり、野坂の関与も断定できない（大森, 1981: 186–187）。野坂の自伝には、真偽不明ではあるが、石垣の活動に野坂が関知していなかったことを示唆する記述がある（野坂, 1989: 155–156, 203）。野坂については、和田（1996）。野坂のアメリカでの活動については、加藤（2017）。この論文には石垣綾子や栄太郎に関する言及もある。

[16] なお石垣は、1937年4月5日に「故国を顧みて」という寄稿も行っているが、「寄書」という単体の記事の体裁を取っており、2日後からの連載と体裁が異なる（羅府新報1937年4月5日、7日）。

カ社会における結婚や職業に関する差別の存在を指摘する。そして石垣は、「二世の問題は二世自身の手で自分自身の社会観を通して、その環境に沿うように育て上げてゆくのが本当の道ではなかろうか。政治家も一世の指導者達もこの伸びゆく枝を、自らの好みに曲げて作り上げてはならないと思う」と記事を締めくくり、彼女自身が二世にかける期待や、日系コミュニティ内部での二世に対する周縁化や抑圧への懸念を示した（1937 年 4 月 29 日）[17]。世代論はアジア系社会をはじめとする移民コミュニティでよく論じられる主題であるが、石垣の場合はとりわけ、日系一世によるその子供たちへの抑圧や世代間の葛藤に関心を払っていた（1937 年 5 月 7 日、6 月 28 日、7 月 2 日など）[18]。

また別の記事も、石垣がロサンゼルスで交流していた二世の女性たちの結婚や恋愛をテーマにしている。二世女性たちは一見すると「何の屈託もなさそう」で、「近代的な利智に澄んだ瞳は〔……〕世の中を立派に処しているように見える」。とはいえ、「心の底を割ってみると、共通した孤独感や悶々とした悩みを秘めている。それは何だろうか」。石垣は、二世女性たちが同世代の若い日系男性を、人格的な幼さや経済的な不安定さを理由に結婚相手として避けている、と論じる。「今どきの青年は経済的に楽ではない。朝から夜まで働いたって、自分一人の口を過ごすにやっとである。しかも彼の将来に、どれだけの道がひらけているというのだろう。こんな男を相手にしたって損だわ、こんな気持ちが彼女のどこかにあるからではないだろうか」（1937 年 4 月 24 日）。日系女性は性差別と人種主義から職業の選択肢が大きく制限されていた。そのため日系女性にとって、結婚が経済的安定を得られるものかどうかが問題になることもあっただろう。だが日系男性や他のアジア系男性の職業選択の幅も狭められており、かといって日系や他のアジア系移民と例えば経済的に恵まれる傾向にあった白人との結婚は、アジア系が多く住んでいた西海岸を中心に禁じられていた（Koshy, 2005: 3–9; Karthikeyan and Chin, 2002: 1–19）。このような状況下で石垣は、日系二世女性の結婚には大きな障壁があると指摘するのであった。

石垣の連載は、日系コミュニティにおけるジェンダー状況と、日本社会のそれとをともに描き出していった点も特徴的であった。例えば 5 月 1 日の石垣の連載は、以下のような印象的な書き出しで始まる。「ひとりの女性を出世の踏み台にして、一切の経済的負担や労働を彼女に負わしておきながらその帰省中だった男がひとたび、チャンスにめぐりあって社会的地位ができると、病床に倒れている妻を弊履のごとく投げ捨てて、足元に踏みにじり唾を吐きかける――といった横暴な男性は、社会の裏面をよく知る者には〔……〕こと珍しい事件ではないかもしれない」（1937 年 5 月 1 日）。石垣の叙述は、最近目にしたという『婦人公論』の沖島とし子の記事を参照している。沖島は、内縁関係にあり結婚も求められていた第 1 回芥川賞受賞作家の石川達三から金銭的に、そしてケアの面で利用されており、暴力を受けたあげく一方的に別れられたと告発していた（沖島, 1937: 272–278）[19]。石垣は、「人間の魂」を繊細に捉え、「良心的であるべき」立場の石川のような男性も女性を抑圧しうることや、そのような男性の抑圧や暴力が否定されず、むしろ肯定的な評価を受けることすらあることを指摘している（1937 年 5 月 1 日）。

石垣の連載において、日本や日系社会におけるジェンダーの状況や女性の地位は幾度となく扱われており、その事例も、日本の母子保護法、理系研究者、公娼制度、軍事動員、日系一世の母親の

---

[17] 以下参照する「随感随想」「女性所感」の著者は全て石垣綾子であり、掲載紙は『羅府新報』であるため、該当記事が掲載された『羅府新報』の日付だけを典拠として表記してゆく。

[18] 日系二世については、Matsumoto（2014）。

[19] 石川のジェンダー観を示す史料として、石川（1938: 362–368）、高見ほか（1937: 152–166）。

女子教育など多岐にわたった（それぞれ、1937年6月30日、7月23日、9月11日、9月15日、8月4日）。石垣の連載は、「環太平洋日本人世界」（南川, 2010）とも呼ばれる日本とアメリカをつなぐような日系人のコミュニティや世界観を、ジェンダーの視点から描き直したものと位置づけられる。とりわけ石垣の議論では、日系社会の女性が直面していた人種やジェンダーに基づく交差的な経験が扱われつつ、それが帝国や国民国家としての戦間期日本のジェンダー状況と並行して論じられていった。

2.「国際連帯」の多義性

しかし石垣の「女性所感」のジェンダーに関する記事は、日本や日系人の事例だけでなく、中国やヨーロッパ、アメリカに関する議論も次第に多くなってゆく。とりわけ、女性の知識人や政治的指導者の姿に焦点を当てる記事が繰り返し書かれた。これらの記事は、彼女がニューヨークでの活動から継続して取り組んでいた「国際連帯」という課題に加えて、様々な背景をもった力強い女性像を論ずることで、保守的なジェンダー観をもっていたといわれる日系一世（Matsumoto, 2014: 11, 13, 16）を中心とした『羅府新報』読者に新しい価値観を提示した。日本の社会運動などの現場で「男のひとたちの間にポツンと混ざるぎこちなさをしみじみと感じていた」石垣は、アメリカで「女性が牛耳っている集会に顔を出して、肩身が広くなったような嬉しさを味わった」という（1937年6月24日）。石垣はこの感覚に基づいて、大統領夫人ならびに社会運動家として人気のあったエレノア・ローズヴェルトや、フィリピンの女性運動などを参照軸に、日本社会におけるジェンダーのあり方を問うていった（1937年6月11日、7月28日）。

石垣が日系移民の書き手として様々な女性を表象し、ジェンダーについて書くにあたって、人種や民族という社会的カテゴリーや、それとジェンダーとの交差性がより明確に表れてくることにもなった。例えば彼女は、その翌年にノーベル文学賞を受賞することになるパール・バックについて記事で取り上げている。石垣は、バックの小説『大地』（原著1931年）における「阿蘭」などの中国女性に関する描写を「東洋的な女の気持ちを、外側から眺める好奇心や優越感からではなく、女としての同情と思いやりで描いているところに、この作品の魅力があり、奥行きがある」と一定の評価を下す。白人によるアジア人表象、特にアジア女性の表象として支配的であった明確なオリエンタリズムの描写（Yoshihara, 2003）とは異なる語りをバックのテクストに読み取っているのである。ただ石垣は、貧困にあえぎ、教育も受けられないような境遇にある女性たちについての叙述をもっと充実させるよう注文をつけた（1937年5月22日）。これに加えて石垣は、別の記事でバックの『大地』『息子たち』『分裂せる家』三部作における中国の農村の表象を論じている。三部作に貫徹されている主題として、石垣は農村や土地への「憧れ」を見出す。それを石垣は、「機械文明を呪い、現在の頽廃的な文化に反対して、田園生活を賛美する一つの表れ」と指摘したうえで、「田園にかえりさえすれば、今の世の中は救われるだろうか。農村の質朴な生活は、都会の喧騒から全く切り離されるだろうか」と疑問を投げかける。石垣の批判は、バックの叙述や映画版『大地』のロマン主義的な表象は中国の「現実」を深く捉えきれていないというものであった（1937年9月25日）。

石垣は3年後、アメリカ知識人に与えられる最高峰のフェローシップであるグッゲンハイム・フェローシップへの推薦をバックに依頼する（Ishigaki, n.d.; Buck, 1940b）。それ以降、バックは石垣の半自伝的作品『憩なき波』（原題：*Restless Wave*）についての好意的な書評を出す一方（Buck, 1940a）、石垣は日系・中国系移民に対する意見をバックに求めたり、バックの「東西協会（East and

West Association）」に協力したりするなどして、両者は交流するようになる（Buck, 1949; Walsh, 1951; 石垣, 1983: 95–109; 1985: 132–148）。しかし石垣は、バックの中国に対する反共主義リベラルとしての姿勢には納得がいかず、中国民衆とのラディカルな連帯を志向したアグネス・スメドレーの態度により共感していた（石垣, 1967: 71–75; 1991: 251–252）。『羅府新報』記者としての石垣は、バックの作品が高く評価され、劇や「活動〔写真〕」すなわち映画へと媒体を変え、ロサンゼルスの「呼び物」としてアメリカでの中国表象やアジア表象を構成してゆくさまを目撃する（1937 年 5 月 22 日）。そこで彼女はアジア系として、バックやアメリカ白人社会による中国表象にオリエンタリズム（Leong, 2005: 106–154）をやはり嗅ぎ取ったといえる。

では石垣自身がロサンゼルスで中国との連帯という課題に向き合うとき、どのような思想を練り、行動をしていったのだろうか。石垣の連帯のヴィジョンは、彼女が中国の女性指導者や運動家を扱った記事に打ち出されている。例えば 5 月中旬の記事は、石垣が目にしたという婦人雑誌をもとに宋美齢を扱っている。宋美齢は蔣介石夫人として知られ、第二次国共合作の契機となった西安事変での活躍を機に、日本やアメリカを含む中国内外で大きな注目を集めていた（Leong, 2005: 123–125; 石川, 2001: 26）。石垣によれば宋美齢は、「国と国との平和が破壊された時に、一番多く苦しまなければならないのは、家庭を守り子供を育てる婦人である。互いに母の立場から固く握手しよう」という信念をもっていた（1937 年 5 月 14 日）。石垣の複数の引用箇所や言及の内容から、彼女が見ていたのは宋美齢が『婦人公論』に寄せた記事だと特定できる（宋, 1937b: 108–115）。宋美齢の寄稿は、当時北京で学園事業に携わっており、のちに桜美林学園初代学園長となる教育家清水郁子との会見を受けてなされた。その席で清水は、宋美齢に東京連合婦人会の連帯のメッセージを伝え、会見後には二人がともに『婦人公論』と『婦人之友』に寄稿するに至った（宋, 1937a: 3; 清水, 1937a: 12; 1937b: 13–15; 1937c: 116–121）。清水は対談にあたって、「ことさらに男子の手にあるオフィシャルな外交というものが、今日までかなり難航を続けてきて」いる状況下で、女性として「参政権もなければ、外交官にもなれる権利のない」立場ではあるが、できる限り日中関係改善に貢献したかったという意図を綴っている（清水, 1937b: 13–14）。石垣はこのような東アジアからの報に接しつつ、それをロサンゼルスで伝えながら、自らも日中連帯の思想や運動を当地で広げようとしていた。

他方で、カリフォルニア滞在中の共産主義運動家であった陸瓘（Loh Tsei）との出会いを中心にした石垣の記事は、女性指導者の活躍が中国の「進歩」的なあり方を示しているとする[20]。いわく、「やっぱり女同志であるせいか、両国の婦人の状態に話は移り、支那婦人の目覚ましい活動や、比較的優れた社会的地位に啓蒙されることが多かった。私たち日本の女は、長年の努力にもかかわらず、まだ婦人参政権を得るに至っていないけれど、支那の婦人は、法律上男性と同様に参政権を得ている事実を知っている人は少ないだろう」（1937 年 7 月 21 日）。

石垣の中国に関する一連の言説は、彼女の国際連帯に関する思想の両義性を示すものであった。日本が長年にわたって中国を侵略する中で、ロサンゼルスの日系コミュニティは、とりわけ一世を中心にナショナリズムを高揚させてゆく（南川, 2007: 141–155; 東, 2014: 285–325）。この移民ナショナリズムについては結論でも触れるが、侵略を肯定するナショナリズムが高まる状況において石垣の記事は、中国社会・民族について肯定的なイメージを喚起させようとする意義があった。女性同士のつながりを基礎とした日中連帯という石垣の構想は、日系移民やそれ以外のアメリカの読者向

[20] 陸瓘については、Lai（2010: 88–99, 112, 185, 187）。

けに、軍国主義に抑圧されている日本民衆と中国民衆との「連帯」のヴィジョンを示し、日本製品ボイコットへの参加などの共闘を促す意味合いがあった（Ishigaki, 1940: 249–252; 石垣, 1990: 266–269; Matsusaka, 2019: 209–210）。

しかし石垣が措定した「女性同士」や「東洋」、「日本民衆」というアイデンティティは、日本の中国に対する帝国主義や加害性、そしてアジア女性内部での立場の違いを過小評価する修辞として機能しうる一面ももった。石垣は陸瓘の発言を以下のように伝える。「私たちは祖国を守るという立場から、支那の国土が侵されることに反対するのですけれど、日本の民衆の皆様には、爪の垢ほども反感や敵愾心などを抱いているものではありません」（1937年7月21日）。陸瓘の発言は、反戦活動家としての石垣個人に対する好意が含まれていると同時に、日本の侵略に対する批判と、日本人全体を標的とした人種主義的な誹謗（ひぼう）とを区別すべきであるという指摘だと考えられる[21]。だが、石垣がこの発言を抜き出す仕方は、日本人が植民地帝国において支配的な民族的主体として特権的な位置を占めている事実から目を背けさせる効果ももちえた。当時、石垣が講演活動などで聴衆に向けてしばしば強調していたのが、〈軍国主義の犠牲者としての日本民衆〉という主旨の言説であり、日本において「草の根帝国主義」（吉見, 2022: 7–10）が進行しつつある状況であったにも関わらず「日本人の多数は日中戦争に反対している」と言い切ることもあった（*Washington Post*, 1938; Matsusaka, 2019: 203–204）。石垣は、あとになって自身の活動の意図を「日本人の本当の姿を身をもって訴えようとした」と説明している（石垣, 1990: 2）。彼女の言論は、「日本人は決して残虐に生まれついているのではな」く、むしろ「美しい自然に囲まれ、優れた文化の伝統と繊細な感性を持っているのだ。そうした背景のなかで黙々と働いてきた日本人は、決して好戦的で血も涙もない強欲な民族ではない」（同上）との本質主義的な理解を土台としていた。そして、そのような日本人は一部の「軍国主義者」によって「戦争の歯車に巻き込まれた」「彼らこそ私たち日本人の敵なのである」という図式を設定していった（同上）。

石垣はこの〈犠牲者としての日本民衆〉という理解に、帝国日本によって被害を受けた側の知識人からも支持があるのだとも主張していった。例えば彼女は、上述の『羅府新報』5月の記事で、宋美齢について「日本人のすべてが悪いなどと考えなくなった」との発言を紹介する（1937年5月14日）。また石垣は戦後アメリカから、「国際婦人会議に出席して」という文章を占領期の東京で発刊された『世界』に寄稿し、この文章は中等学校国語教科書にも収められたが、そこでも類似する議論を行った。彼女は、1946年10月にニューヨーク郊外で行われた国際婦人会議に参加した経験を報告する中で、一方では日本人が戦争責任と向き合う必要性を真摯に訴えている。しかし他方で、日本と中国の女性は「真の友」であるという李徳全の発言を紹介しながら、「彼女が私を通して、今は同じ苦しみを分かちつつ、解放の途上にある日本の女性に愛情を感じている」と述べる。さらに石垣は、日本軍に苛烈な拷問を受けた経験をもつというフィリピンからの出席者メルセデス・エヴァンゲリスタのあり方も「日本軍閥を責めはすれど、その同じ犠牲者である日本人民を少しも責めてはいない」とした。このことにより、フィリピンの人々と日本の人々とを同じ「犠牲者」であるとしつつ、侵略と支配の被害を受けた側である前者から加害の側にいた後者に対して示される〈理解〉の姿勢を強調した（石垣, 1947a: 58–59; 1947b: 14–15; Matsusaka, 2019: 203–226）[22]。このような石垣

[21] 当時のアメリカでの日本製品ボイコット運動でも同様の主張が見られた（Glickman, 2005: 603）。

[22] 石垣は「M. エヴァンガリスタ」と叙述しているが、他の史料から、フィリピン全国女性クラブ連盟会長トリニダード・レガルダの秘書を務めていたメルセデス・エヴァンゲリスタ（Mercedes Evangelista）と特定できる

の議論においては、「アジア女性」として連帯を模索する言論が、創られた「日本人」の平和的な「本当の姿」を前提とし、かつ日本女性と他の民族の女性が同様の「解放」の課題をもっているかのように打ち出された。そのため、人種・民族的ヒエラルキーをはじめとする、日本の植民地主義と侵略の加害によって現に形成されていたアジア女性内部の権力構造や、それと関連した経験の違いを覆い隠す危険性も孕んでいた。

石垣の中国／アジア論は、1930年代にジェンダーの視角をもちつつ、中国との連帯やパール・バックの作品を扱った作家・宮本百合子の議論と好対照をなす。宮本は、バックの中国関連の作品について概ね高い評価を与えている。とりわけ、バックが宣教師の家庭の出身でありながら、中国民衆の民族的自立性を認め、中国におけるキリスト教や宣教師の役割を帝国主義的であると評している点を「一つの驚くべき人間的誠実」であるとしている（宮本, 1937b: 27）。宮本は、バックが中国の民衆と向き合おうとしていることと対比させて、日本の作家が「現代の支那の人民の生活を〔、〕それを描こうとして描いている作家は殆どない〔……〕婦人作家には全くないといえるのではあるまいか」（宮本, 1937a: 100）と問う。特に、「明治以来日本が支那との関係においては、支那の一般人間としての日常生活の利害の上には立たず、常にその反対物としての権力関係にあったので、その微妙な反映が文学の面にもあらわれている」（同上）という彼女の姿勢は、石垣のそれとは明確に異なっている。宮本が言論弾圧を受け、検閲体制とせめぎあった末に選んだ微妙な言葉遣い[23]の裏に透けて見えるのは、真の国際連帯は自らの社会が手を染めている不正義と向き合ってこそ実現されうるという宮本の考えである。宮本は、日本のアジアへの帝国主義的侵略が日本の書き手の立場性や問題関心をどう形づくったり制限したりしたのかを見つめようとしていたのであった。

宮本のような論者との対比においても見えてくる石垣の言論の特徴は、彼女自身の思想的展開においてどのように形づくられたのだろうか。次章でさらに考察してみよう。

V. 反戦運動と移民ナショナリズム、帝国のイデオロギー

石垣の『羅府新報』以前、すなわち1930年代中盤までの仕事においては、本論文前半で検討した通り、日米の階級闘争や帝国主義といった主題について帝国横断的に取り組む要素があった。また「中国友の会」での活動、社会主義系の雑誌『今日の中国』への寄稿において顕著に見られるように、中国侵略を加速化させていた日本帝国主義との対決と、日中民衆の連帯運動の形成という二つの課題も前面に出ていた。ただその中で描かれ始めていたのが、戦争の負担にあえぐだけでなく、「中国の軍事侵略によって自らに強いられた半ば飢餓の状態」に「よく気づいている」といった、やや図式的な日本民衆像であった（Ishigaki, 1938: 12）。そこで想定されたのは、賃上げのためにストライキに立ち上がる労働者や、反ファシズム運動に参加する女性など、階級的利益を共有し、階級意識をもつ民衆である（同上 ; Ishigaki, 1937: 50）。石垣は、反戦運動に参加する移住者として「中国民

（International Assembly of Women, 1946; *Woman's Home Journal*, 1947）。レガルダとエヴァンゲリスタはアメリカ滞在中、国際婦人会議に出席するだけでなく、貧困にあえぐフィリピンの子どもへの支援を訴える活動も行った。彼女らのフィリピンでの活動は、日本軍の侵略によって施設が爆破されるなどの被害を受けていた（*Woman's Home Journal*, 1947）。

[23] 宮本は数か月後にも中国文化との真摯な向き合いを唱えたが、その記事は一部伏字になった（宮本, 1937c）。宮本は1932年に治安維持法で検挙されたあと出所しており、1937年末には執筆禁止処分を受けた（池田, 2015: 40, 119）。伏字や検閲については、牧（2014）、Abel（2012）など。

族」と「日本民族」との連帯を唱える過程で、帝国そして移民の「本国」である日本の民衆像を創造／想像しつつ、自らの「日本人」としてのアイデンティティを表現し始めてもいた（Ishigaki, 1937）。だがそれでも、30年代中盤までの石垣の議論においては、あくまで日本やアメリカの帝国主義を批判する問題意識が明瞭であった。

石垣の『羅府新報』での作業は、彼女の思想と運動の一つの転機となった。より具体的には、それ以降の活動において、また彼女が3年後に出版する『憩いなき波』（Ishigaki, 1940; 石垣, 1990）において展開する議論を準備した。とりわけ看取されるのは、ロサンゼルスの日系移民コミュニティで生活し、取材し、叙述することを通じて、彼女の政治的言説が日系移民のナショナリズムの色彩をより強く帯びるようになったことである[24]。ニューヨークにおいても彼女はそれなりに日系移民と会う機会はあったが（石垣, 1932b: 182–186）、同地でのその人口は約2,400人と比較的少なく、「大海の一滴」のように点在していた（Inouye, 2018: 138–188）[25]。石垣はヨーロッパ系移民の多いグリニッジヴィレッジを拠点に社会運動に携わったことで、人種や民族を越えた――特にヨーロッパ系や中国系との――交遊が多かった。他方で、ロサンゼルスの日系移民の人口は約21,000人にのぼっていた（南川, 2007: 138）。石垣は、日本からの移民やその家族が多く集住するリトルトーキョーにある羅府新報社に勤務し、記者活動を通じて「羅府同胞社会」（1937年6月28日）に身を置くことで、「日系」ないし「日本人」という民族的なアイデンティティを強くすることになった。石垣の『羅府新報』での仕事は、数年間の中断を挟んだのち、彼女が久しぶりに行った日本語での出版活動でもあった。石垣の内面における移民ナショナリズムは、『羅府新報』の仕事を終えてニューヨークに戻ったあと、「知らない間に道ゆく人込みの中に同胞の影を探している」と自覚するほどのものでもあった（1937年11月3日）。

移民ナショナリズムの枠組みを押し出すにあたり、石垣は日本の軍国主義に反対しつつも、帝国日本のアジア主義的な言説や、同時代的に急速に広がりつつあった「日本主義文化論」的な修辞（林, 2005: 254）を用いるようになる[26]。例えば石垣は4月の「女性所感」で、リトルトーキョーの書店で目にする日本の女性雑誌を、売れ行きのためにセンセーショナルで性差別的・女性蔑視的な内容を書き連ねるものとして批判する。女性雑誌で描かれる女性像は、「時代的苦悶や、家庭生活や経済生活の破綻の中に身をさらしている」現実の女性の経験とはかけ離れており、それらの雑誌は女性読者たちにとって有益なものではない、というのが石垣の批判の一つであった。かかる批判自体はきわめて重要なものだったが、記事の後半で彼女は、部分的には日本の文化ナショナリズム的な言説を利用し、かつそれをアジア主義的に再定義しようとする。つまり、昨今の「お茶とかお花とか踊り」などの「旧日本趣味」がロサンゼルスでも日本でも盛んになっている状況自体は、石垣にとって、「新しい美を発見し〔……〕優美な立ち振る舞いを会得すること」であり「よい嗜み」なのであった。彼女にとって問題にされるべきは、前時代的なジェンダーの考え方や役割を女性に押し付けることである。したがって石垣の結論は、「美しい伝統的な東洋文化を大胆に取り入れるとともに、時代の動きを聡明に判断して世界の進歩とともに歩む婦人でありたい」というものだった（1937年4月26日）。また石垣は、日本社会が戦争の機運の中で女子教育の機会を抑圧し、「サーベルと剣の

[24] 日系の移民ナショナリズムについては、南川（2007）、東（2014）。また、本論文結論部での議論も参照のこと。

[25]「大海の一滴」の語は石垣自身による（「女性所感」1937年11月3日）。1930年、ニューヨーク州に日系人は2,930人おり、うち2,356人がニューヨーク市に在住していた（Inouye, 2018: 138–139）。

[26] 日本主義やアジア主義に関する議論として、小路田（2012）。

威圧で女性の自覚を押しつぶそう」としつつあることを以下のように批判する。「このごろ、バカに幅を利かせる軍部の方は、日本固有の美風を磨けとかいわれて婦人の学問を軽視される。〔……〕シェイクスピアの傑作に伍して賞賛される源氏物語は、日本の女性の手に綴られたものではないか。台所の隅にくすぶった女性から、どうして、これほど優れた日本の固有の文化を生み出すことができただろう」。このようにして「日本の女性」の知の重要性を指摘したうえで、石垣は、軍国主義への動員について男女の不平等が前提されていることを論じる。「国防には婦人も参加しなければならぬと提唱される今日、婦人にとって英語や化学が不必要であるとは、どうしても考えられない。弱い日本の女性だって祖国が支那のように外国から無理な干渉を受けたら、剣を持って立つだけの覚悟は立派にもっている」（1937 年 4 月 14 日）。これらの記事で石垣は、戦時体制に向かう日本政府・社会が動員するファシズムとしての日本主義イデオロギーを強制性や性差別の観点から批判した。だが、日本主義の核となっていた「古来」ないし「固有」の「日本文化」という本質主義的なテーゼについては利用し、ファシズムと違う形式で再定義しようとした。したがって石垣にとって、日本人の「潔」い「大和魂」なるものも本来は存在するし、日本には「固有の田園風俗」があり、それは「美し」く「世界に誇ってもよい」ものである（1937 年 7 月 30 日、5 月 15 日）。石垣が問題としたのは日本主義そのものではなく、それを抑圧に利用する政治体制であった。

石垣の議論は、和辻哲郎に代表される「風土」と「民族」を結合させた日本主義文化論（小路田, 2012: 169–198; 林, 2005: 240–258）と響き合いながら移民ナショナリズムが形作られる過程を示す。文学研究者の林淑美は、戸坂潤の議論を引きながら以下のように鋭く指摘する。「露骨な天皇賛美や国粋的な民族文化の宣揚だけが、日本主義思想なのではない。政治的分類が容易な言説の外で、文学のことばは、ふつう思想と呼ぶようなもののずっと手前の人間の日常的な意識や感情の及ぶ場面で働きかけてくるのだ」（林, 2005: 251）。このような分析は、数年後に半自伝的作品『憩なき波』でキャリアを飛躍させることになる石垣の『羅府新報』での仕事を理解する上で有効である。移民の生活やその「母国」の文化を扱った石垣の新聞記事は、まさに日系読者の日常的意識や感情に作用するジャンルの文章であったからである。彼女は『憩なき波』出版の前後で、日本の戦争に反対し、平和を訴えながら「日系移民女性」というアイデンティティを前面に押し出す（松坂, 2018; Matsusaka, 2019: 204–210）。のちに石垣が、日本民族は本来平和を愛する民族であるのに、一部の軍国主義者のみが戦争を行ったという歴史観を明らかにしたことは、上にも触れた通りである。彼女のこのような歴史観や 30 年代末・40 年代の活動の支えとなったのが、『羅府新報』で展開した日本主義的文化論や移民ナショナリズムであった。彼女の帝国日本に対する反ファシズムは、日系移民ナショナリズムを媒介として、帝国日本に特徴的な言説を内包するというアポリアを抱えることになった。

VI. おわりに

本論文では、第一次世界大戦後から日中戦争開始前後までの石垣綾子の活動や思想的発展を分析してきた。最後に、その内容を簡単にまとめつつ、今後の研究の展望を述べる。石垣は初め、大正デモクラシー下の東京で展開しつつあった社会主義フェミニズムに参加することによって社会運動家として歩み出し、その後、女性として生き方の選択肢が制限されている日本社会を離れ、人生の新しい可能性をひらくために渡米する。ニューヨークで言論活動を本格化させると同時に、日本の

軍国主義に反対する運動を展開する。日本社会は1920年代末から、「ファシズムと戦争が〔……〕首根っこを押さえつけ」る（久野, 1986: 8）ように言論弾圧が一層あからさまになり、急進的な社会運動は困難になった。しかしアメリカにおいては、反共主義が根強く、また人種主義も広範に見られたとはいえ、反差別運動や反ファシズム運動、労働運動など様々な社会運動も拡大していた（Goldstein, 2014; Purnell and Theoharis, 2019; ナイ, 2021; Denning, 1996）。石垣は社会運動やその文化の一つの中心地ニューヨークで、様々な活動家との出会いも経ながら、平和運動を展開した。1937年には、『羅府新報』客員記者としてロサンゼルスの日系コミュニティに身を置き、半年にわたって日系社会や日本国内外の社会・時事問題について連載した。

非白人女性が性差別と人種主義の交差的な抑圧を受けるアメリカにおいて、石垣の政治的自由さは十全に保障されていなかったが、彼女は行動力で運動の地平を切りひらいていった。彼女は、男性中心的な言論世界において問題にされることの少なかったジェンダーに関する課題を鋭く描くと同時に、「本国」日本におけるジェンダーの状況も並列させながら論じた。彼女は次第に、（在米）日本人女性の平和運動家としてのアイデンティティを押し出すようになりつつ、日本の軍国主義に反対し、国際連帯を唱えた。

このような石垣の議論には、社会変革の思想や反戦の主張だけではなく、移民ナショナリズムを媒介とした、帝国日本のイデオロギーと部分的に重なる部分が徐々に見られるようになった。本論文では、『羅府新報』勤務時ならびにそれ以降石垣が展開した日中連帯の言説に、日本の植民地主義に由来するアジア（系）女性の立場性の違い、特に日本人の特権性の過小評価につながる内容や、日本主義的な修辞が見られることを指摘した。「「日本的なるもの」を抽出し賛美する」言説としての「日本主義」（宮川, 2011: 180）は、日本で特に官憲の弾圧によってマルクス主義が後退する1930年代以降、メディアで「教養」といった形態も取りつつ夥（おびただ）しい量にわたって生産される（竹内・佐藤, 2006: 1–2）。数少ない日系女性の書き手であった石垣の場合、アメリカ西海岸の日本語圏の読者に反戦平和やフェミニズムのメッセージを伝えやすくするために戦略的にナショナリズム的な言辞を用いていたのかもしれない。あるいは、移民コミュニティで日系ないし日本人としてのアイデンティティを強めた結果として、無意識的に日本主義の表現を取り入れたのかもしれない。いずれにしても石垣の事例は、先行研究で主に帝国日本やその植民地の文脈において検討されてきた日本主義的、ないしアジア主義的な言説が、帝国域外の日系移民にも共有されていたことを示唆する。言い換えれば、日本主義を核とする日本の帝国主義が、移民社会という周縁的な場、そして移民社会のジェンダーの磁場の中で強く作用していたことを示唆している[27]。

前述のように、1930年代の日系社会一般では、日本の中国侵略の展開とも連動しながら移民ナショナリズムや軍国主義が広がっていた。日系アメリカ史と移民ナショナリズムを論じる先行研究でも、満州事変や日中戦争開戦といった軍事・政治的展開を転換点としてナショナリズムの高揚を理解する考え方が示されてきた[28]。しかし石垣の事例において見られるのは、国際政治の情勢だけ

---

[27] 日米帝国とジェンダーに関する近年の重要な研究として、加藤シヅエとマーガレット・サンガーの産児制限運動を扱ったTakeuchi-Demirci（2018）があり、同書では石垣綾子の加藤シヅエに対する批判にも言及がなされている（76）。

[28] 例えば、Ichioka（1990）、市岡（2013）。この研究は、日系移民史と日本のアジア侵略拡大を結びつける視点が重要だったが、帝国主義や侵略を支持する日系移民のナショナリズムを、他の移民集団のナショナリズムと同列に扱い、植民地解放を目指したコリア系のナショナリズムとも同様のものとして位置づけてしまう限界もあった（Ichioka, 1990: 274; 市岡, 2013: 186–187）。満州事変を日系移民の日本に対する「〈忠誠〉表明の増幅」の画期と

でなく、個人の行動や移動経験、ジェンダーへの考察などが移民ナショナリズムと関連していることである。彼女が反戦運動を継続してゆくにあたって、日本主義的言説・修辞を用いた移民ナショナリズムを顕在化させたことは、アメリカ東海岸から西海岸に移動して大規模な日系社会で活動するようになったことや、それに伴って言語環境が変化したことと概ね時期的に符号している。移民ナショナリズムが高まっていたロサンゼルスの日系社会、日本語世界での活動は、日系市民そして日本人というエスニック集団を単位とする枠組みを押し出し、かつ、「日本人」と「中国人」というアプリオリに措定されたエスニック集団同士の連帯を主張することにつながった。その際に石垣はしばしば、同時代に植民地朝鮮出身のフェミニストやアフリカ系アメリカ人フェミニストなどから提起されていた、マイノリティ女性とマジョリティ女性の差異を浮き彫りにする議論（黄, 1926; McDuffie, 2011: 48–52, 112–113）とは違う、女性同士の共通する経験を強調する立場も打ち出した。本論文ではそれが、帝国日本が生んでいたアジア人／系内部での不均衡な関係を看過するロジックにつながっていったことを確認した。

以上のような石垣の事例は、既存のアジア系アメリカ研究ならびにトランスパシフィック研究でしばしば軽視されがちであった二つの議論の方向性を指し示す。それは第一に、アジア系アメリカ移民の「間－帝国的（inter-imperial）」な経験を「帝国横断的（cross-imperial）」な視点から見直すことである。石垣綾子は、移民によって二つの帝国を経験しただけでなく、移住経験を足掛かりとして二つの帝国を批判対象とした。特に 1927 年代末から 1930 年代前半までの彼女の議論は、上述した通り形式においても内容においても「帝国横断的」であった。石垣はその時期、社会運動に対する弾圧と運動圏における男性中心主義という帝国日本での困難さを乗り越える道筋をニューヨークの社会運動圏に見出す。当地にて活動を広げながら、ジョン・リード・クラブといったアメリカ社会主義思想・運動のレンズを通して日本とアメリカの帝国主義を批判する議論を日本の読者に向けて展開した。このような石垣のあり方は「〔帝国の〕間（あいだ）で策略の空間や行為者性（agency）を創出する」（A. Espiritu, 2014: 238）実践とも呼べる。しかし石垣は、『羅府新報』勤務以降、軍国主義に反対し反戦を唱える主張を広げてゆく一方で、移民ナショナリズムや日本主義と接近することになる。ここにおいて、民族的アイデンティティを打ち出す移民ナショナリズムは、アメリカにおけるアジア系／日系女性に対する交差的な差別に対する武器になりえただけでなく、その差別におけるオリエンタリズムを自ら再生産したり（Matsusaka, 2019: 204–210）、帝国日本の社会構造と日本人／日系人の（特権的）主体性とを日本主義を媒介として再接続したりするものでもあった。思想的展開とナショナリズムやジェンダー、レイシズムがこのように取り結ぶ間－帝国的なアポリアの特徴は、彼女のように越境した知識人・社会運動家の帝国横断的な思想や行動を具体的に追ってゆくことで今後より一層明らかになろう[29]。

第二に、石垣の事例は、アジア系アメリカ研究、特にその交差性の考え方において、ディアスポラ研究で言及されている「間－アジア的（inter-Asian）」な視点（Parreñas and Siu, 2007: 16）を深化させることの重要性を示している。石垣が中国系の女性との連帯を模索した実践は、彼女がア

する見方として、坂口（2001: 31）。また、アメリカの人種エスニック編成の文脈を重視しつつ日系社会の変遷を検討した南川（2007: 133–155, 158–164）も、1920 年代と 30 年代の移民ナショナリズムについて、日系移民の「定着志向」や「長期的適応過程」、「植民地主義的なイデオロギー」を背景とした連続性を指摘するが、30 年代末のナショナリズムの高まりを説明する際には、日中戦争勃発に伴う日系社会の言説・運動の展開を前提としている。

[29] 注 1 で触れた「貫－帝国」概念と「帝国横断」概念の関係については、紙幅を超えるため別の機会に譲りたい。

メリカで得た出会いを生かして、アジア系女性が人種的かつジェンダー的に周縁化されるという共通の経験を基盤に構想したものだった。しかしその交差性のみを見ていると、アジア系女性の間で生まれていた、植民地主義による立場性の差異を看過することになる。その差異を考慮に入れつつ、日系やほかのアジア系の移民の主体性をより仔細に検討するために、アジア系同士の関係や異同を浮き彫りにするような「間－アジア的」視点を深めることが求められる。

アジア系アメリカ研究はもともと、アジア系の諸エスニック集団を包摂する社会運動にルーツをもつが（Y. L. Espiritu, 1992）、個々の研究を見ると、アジア系という枠組みを用いつつも実際には一つのエスニック集団を事例に取るものが多い。しかし特に20世紀前半のアジア系の経験には、侵略の拡大を支持する日系の軍国主義的移民ナショナリズムや、支配された出身地の解放を望む中国系やコリア系の反帝国主義的ナショナリズムなどに見られるように、帝国日本やその侵略、植民地主義のあり方とつながりがあった（A. Espiritu, 2014: 23; Matsusaka, 2019: 14）。アジア系移民の経験を十全に明らかにするためには、このことを勘案する必要がある。主に中国人や中国系との連帯を模索していた石垣の事例は、移民たちが日米帝国をまたがるように展開した思想や両帝国間で経験した人種・民族的秩序を、交差性に加えてアジア系同士の関係という視点から再検討する重要性を示している。石垣が中国の知識人たちと戦後の帰国後も交流したことや、朝鮮の独立や分断に関して発言したことがあることからも（石垣, 1983: 162–169; 石垣, 1989; 朝鮮画報社, 1992）[30]、彼女の仕事を間－アジア的な視点から詳細に見てゆく必要性が指摘できる。

昨今の大衆レベルでの日系移民史の語りに目を転ずれば、帝国日本の加害性や植民地責任を脱色するジェンダー化された苦労物語に重きを置く例が目立ち（石井, 2014; 東, 2014: 7–8）、日本の帝国主義や戦争の加害性を矮小化する政府やマスメディアの歴史修正主義とも響き合っている（山口ほか, 2016; 山田, 2001）。このような状況でこそ、石垣のような移住者の経験――日本の帝国主義やジェンダーを批判し、同時にその批判が、植民地主義に由来する特権性の看過や日本主義の肯定という問題を含んだ、交差的な事例――を正面から捉え直してゆく必要があるだろう[31]。

※本研究は、JSPS科研費JP23K17116（2023年度）、UCLA Terasaki Postdoctoral Fellowship in Japanese Studies（2019年度）、SSRC-Mellon International Dissertation Research Fellowship（2016年度）の助成を受けた研究成果の一部である。史料調査にご協力いただいた太地町立石垣記念館、日本近代文学館、和歌山県立近代美術館、Pearl S. Buck International、重要なコメントをくださった匿名の査読者2名に御礼を申し上げる。

---

[30]『憩いなき波』における朝鮮人に関する表象については、Matsusaka（2019: 211–217）。

[31] 石垣綾子の事例は、近年研究が進んできた帝国日本や日系移民のセトラーコロニアリズム（入植者／移住型植民地主義）の観点からも分析される必要があるだろう。元来イギリスやアメリカなどの欧米の帝国主義の分析に用いられていたセトラーコロニアリズム概念は、ハワイのアジア系移民ないしその子孫の立場性や（Fujikane and Okamura, 2008）、帝国日本からの移民送出ならびにそれに関連する言説（Lu, 2019; 東, 2022）、アイヌ民族への植民地主義（平野, 2022）などの解釈に用いられるようになっている。石垣綾子の仕事は、社会変革やアジア連帯の立場から日本の軍国主義を批判したという点では、帝国日本の「発展」の担い手を自負してそのことを打ち出すような植民地主義（東, 2022）と異なる。しかし石垣がカリフォルニアを「植民地」と呼び、「同胞先駆者」が「苦闘」して「緑の田畑に田園に開墾」した（羅府新報1937年4月17日）などと書いていたことは、そこが元来は先住民の土地であったという事実を移民の開拓の物語によって覆い隠すセトラーコロニアリズム（Fujikane and Okamura, 2008: 2; Lu, 2019）の表現の一様態に当たるとも考えられる。

参照文献

・一次史料（日本語）
「青インキ」『羅府新報』1937 年 9 月 29 日.
石垣綾子（田中綾子）「婦人と奴隷制度」『早稲田大学新聞』1924 年 7 月 2 日.
――――（田中綾子）「無給の妻」『婦人運動』5 巻 1 号，1927 年 a.
――――（田中綾子）「アメリカの子供「ジム」」『婦人之友』21 巻 8 号，1927 年 b.
――――（田中綾子）「日本婦人運動の過去現在及び将来（二）」『在米労働新聞』1928 年 7 月 5 日（Box 47, Folder 3, Karl Yoneda Papers, University of California, Los Angeles Special Collections）.
――――「ジョン・リードの死を記念する」『女人芸術』5 巻 2 号，1932 年 a.
――――「ジョン・リード・クラブの活動」『プロレタリア文学』1 巻 3 号，1932 年 b.
――――（田中メイ）「故国を顧みて」『羅府新報』1937 年 4 月 5 日.
――――（田中メイ）「随感随想」『羅府新報』1937 年 4 月 7 日，14 日.
――――（田中メイ）「女性所感」『羅府新報』1937 年 4 月 16 日，17 日，24 日，26 日，29 日，5 月 1 日，7 日，14 日，15 日，22 日，30 日，6 月 11 日，24 日，28 日，30 日，7 月 2 日，21 日，23 日，28 日，30 日，8 月 4 日，9 月 11 日，15 日，25 日，11 月 3 日.
――――（田中メイ）「グリニッジヴィレッジ：ニューヨークにて」『羅府新報』1937 年 10 月 16 日.
――――（田中メイ）「紐育から」『羅府新報』1938 年 1 月 12 日.
――――「国際婦人会議に出席して」『世界』14 号，1947 年 a.
――――「国際婦人会議に出席して」文部省編『中等国語 2（2）』文部省，1947 年 b.
――――『夫婦』光文社，1957 年.
――――『私の爪あと』東都書房，1960 年.
――――『回想のスメドレー』みすず書房，1967 年.
――――「埋もれた婦人運動家（6）島野初子」『婦人公論』57 巻 7 号，1972 年.
――――「在米中の体験」丸山真男ほか『大山郁夫〔評伝・回想〕』新評論，1980 年.
――――『美しき出会い』ドメス出版，1983 年.
――――『アメリカに学ぶこと：パール・バックの人生論』岩波書店，1985 年.
――――『わが愛の木に花みてり』婦人画報社，1987 年.
――――「私を目覚めさせた朝鮮民族の叫び」『民涛』7 号，1989 年.
――――『憩なき波』佐藤共子訳，未来社，1990 年.
――――『わが愛、わがアメリカ』筑摩書房，1991 年.
石川達三「妻の教育」『婦人公論』23 巻 10 号，1938 年.
沖島とし子「妻を食う男：死を賭けた純情を裏切られた女の手記」『婦人公論』22 巻 4 号，1937 年.
清水郁子「南京から：清水夫人第一・二信」『連合婦人』89 号，1937 年 a.
――――「南京に蔣介石夫人宋美齢女史を訪う」『連合婦人』89 号，1937 年 b.
――――「西安事変後初めて蔣介石夫人に会う」『婦人公論』22 巻 5 号，1937 年 c.
宋美齢「宋美齢女史よりメッセージ」『連合婦人』89 号，1937 年 a.
――――「今の心境と信念を語って日本のために祈る」『婦人公論』22 巻 5 号，1937 年 b.
高見順ほか「現代における男の立場・女の立場を語る」『婦人文芸』4 巻 1 号，1937 年.
「田中メイさん送別会」『羅府新報』1937 年 9 月 30 日.
朝鮮画報社「石垣綾子：朝鮮の統一は必ずなしとげられます」朝鮮画報社編『こんにちは朝鮮：朝・日新時代のために』朝鮮画報社，1992 年.
黄信徳「（三）日本婦人の無理解さ」『婦人公論』11 巻 5 号，1926 年.
宮本百合子（中條百合子）「パール・バックの作風その他」『婦人文芸』4 巻 3 号，1937 年 a.
――――（中條百合子）「中国に於ける二人のアメリカ婦人：アグネス・スメドレーとパール・バック」『婦人文芸』4 巻 7 号，1937 年 b.
――――（中條百合子）「中国文化をちゃんと理解したい」『新潮』34 巻 10 号，1937 年 c.
リード，ジョン「死者と生者」山川均訳『前衛』1 巻 2 号，1922 年 a.
――――「ロシアの冬」山川菊栄訳『前衛』1 巻 2 号，1922 年 b.
――――「1917 年 11 月 7 日」伊藤貞助訳『文芸戦線』5 巻 11 号，1928 年.

・一次史料（英語）
"Boycott on Japanese Goods Opened by American Chinese." *New York Times,* October 10, 1931a.
Buck, Pearl S. "Asia Book-Shelf." *Asia* 40, no. 3（March 1940a）.
————. [Mrs. Richard J. Walsh]. Letter to Ayako Ishigaki [Haru Matsui], October 3, 1940b. Papers of Pearl S. Buck, Box 6, Folder 7, Pearl S. Buck International.
————. [Mrs. Richard J. Walsh]. Letter to Ayako Ishigaki [Haru Matsui], December 15, 1949, 日本近代文学館所蔵.
"Chinese Here Intensify Boycott on Japanese." *New York Times,* November 14, 1931b.
"Friends in America." *Woman's Home Journal* 17, no. 17（January 1947）.
International Assembly of Women. "Delegates Attending International Assembly of Women," 1946. Box 7, Folder 8, Josephine Schain Papers, 1907–1960, Sophia Smith Collection, Women's History Archive, available in *Women and Social Movements, International: 1840 to Present* database, Alexander Street.
Ishigaki, Ayako [Haru Matsui, pseud.]. Letter to Pearl S. Buck [Mrs. Walsh], n.d. Papers of Pearl S. Buck, Box 6, Folder 7, Pearl S. Buck International.
———— [Haru Matsui, pseud.]. "Factory Slaves in Japan." *China Today* 1, no. 10（July 1935）.
———— [Haru Matsui, pseud.]. "Slaves among the Cherry Blossoms." *Communist Review*（February 1937）.
———— [Haru Matsui, pseud.]. "Japanese Workers Carry the Burden." *China Today* 4, no. 10（July 1938）.
———— [Haru Matsui, pseud.]. *Restless Wave: An Autobiography*. New York: Modern Age Books, 1940.
"Japanese, Chinese Girls will Speak." *Washington Post*, May 16, 1938.
United Against Fascism and Peace [sic]. "Proceedings: Third U.S. Congress Against War and Fascism." 1936. American League for Peace and Democracy Collected Records, Box 1, Swarthmore College Peace Collection.
Walsh, Richard J. Letter to Ayako Ishigaki, September 24, 1951. Papers of Richard J. Walsh, Box 27, Folder 11, Pearl S. Buck International.

・二次文献（日本語）
東栄一郎『日系アメリカ移民　二つの帝国のはざまで：忘れられた記憶 1868–1945』飯野正子監訳，明石書店，2014年.
————『帝国のフロンティアをもとめて：日本人の環太平洋移動と入植者植民地主義』飯島真里子ほか訳，名古屋大学出版会，2022年.
池田啓悟『宮本百合子における女性労働と政治：1930年代プロレタリア文学運動の一断面』風間書房，2015年.
石井裕也監督『バンクーバーの朝日』フジテレビジョン・東宝・FNS27社製作，フィルムメイカーズ制作，2014年.
石川照子「米中関係と宋美齢：日中戦争時期の対中支援要請活動をめぐって」『大妻比較文化』2号，2001年.
石原真衣・下地ローレンス吉孝「討議インターセクショナルな「ノイズ」を鳴らすために」『現代思想』50巻5号，2022年.
市岡雄二「日本人移民のナショナリズム：一世と日中戦争 1937–1941」関元訳，ゴードン・H・チャン／東栄一郎編『抑留まで』彩流社，2013年.
井原あや「女性週刊誌で「ヒロイン」を語るということ：石垣綾子「近代史の名ヒロイン」を考える」『大妻国文』44号，2013年.
大森実『戦後秘史3　祖国革命工作』講談社，1981年.
奥村一郎編『生誕120周年記念　石垣栄太郎展』和歌山県立近代美術館，2013年.
加藤哲郎「米国共産党日本人部研究序説：藤井一行教授遺稿の公開によせて」『アリーナ』20号，2017年.
亀井俊介編『日本人のアメリカ論』研究社，1977年.
久野収『ファシズムの中の1930年代』リブロポート，1986年.
小路田泰直『日本史の思想：アジア主義と日本主義の相克』新装版、柏書房，2012年.
コリンズ，パトリシア・ヒル『インターセクショナリティの批判的社会理論』湯川やよいほか訳，勁草書房，2024年.
コリンズ，パトリシア・ヒル，スルマ・ビルゲ『インターセクショナリティ』下地ローレンス吉孝監訳，人文書院，2021年.
斉藤道子『羽仁もと子：生涯と思想』ドメス出版，1988年.
坂口満宏『日本人アメリカ移民史』不二出版，2001年.

清水晶子「「同じ女性」ではないことの希望：フェミニズムとインターセクショナリティ」岩渕功一編『多様性との対話』青弓社，2021 年.
妙木忍『女性同士の争いはなぜ起こるのか：主婦論争の誕生と終焉』青土社，2009 年.
竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代：大学批判の古層』柏書房，2006 年.
鄭暎惠『〈民が代〉斉唱：アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店，2003 年.
鄭暎惠・岡真理「グローバル・フェミニズムの可能性」『インパクション』94 号，1995 年.
ナイ，メイ・M『「移民の国アメリカ」の境界：歴史のなかのシティズンシップ・人種・ナショナリズム』小田悠生訳，白水社，2021 年.
野坂参三『風雪のあゆみ（八）』新日本出版社，1989 年.
ハルトゥーニアン，ハリー『近代による超克：戦間期日本の歴史・文化・共同体　上』梅森直之訳，岩波書店，2007 年.
フジタニ，T.『共振する帝国：朝鮮人皇軍兵士と日系人米軍兵士』板垣竜太ほか訳，岩波書店，2021 年.
堀眞由美「20 世紀後半におけるわが国主婦の社会的職業進出：石垣綾子「主婦という第二職業論」をめぐって」『女性文化研究所紀要』4，1995 年.
牧義之『伏字の文化史：検閲・文学・出版』森話社，2014 年.
牧瀬菊枝「記録・島野初子の思想と仕事」『思想の科学　第 5 次』64 号，1967 年.
松坂裕晃「社会を変えようとした二人：石垣栄太郎と石垣綾子」『和歌山県立近代美術館ニュース』94 号，2018 年.
水谷智「「間-帝国史 trans-imperial history」論」日本植民地研究会編『日本植民地研究の論点』岩波書店, 2018 年.
南川文里『「日系アメリカ人」の歴史社会学：エスニシティ、人種、ナショナリズム』彩流社，2007 年.
――――「多人種都市ロサンゼルスと環太平洋の想像力：リトルトーキョー／ブロンズヴィルの経験から」『立命館言語文化研究』21 巻 4 号，2010 年.
宮川康子「戸坂潤『日本イデオロギー論』」子安宣邦編『日本思想史』人文書院，2011 年.
牟田和恵『戦略としての家族：近代日本の国民国家形成と女性』新曜社，1996 年.
村上潔「1950 年代、石垣綾子による女性の結婚と労働の提言」『*Core Ethics*』2 号，2006 年.
山口智美ほか『海を渡る「慰安婦」問題：右派の「歴史戦」を問う』岩波書店，2016 年.
山田朗『歴史修正主義の克服：ゆがめられた〈戦争論〉を問う』高文研，2001 年.
山田千香子「カナダの日系移民：ジェンダー視点からの考察」粟屋利江・松本悠子編『人の移動と文化の交差』明石書店，2011 年.
山田智輝「帝国の境界を越えて：間－帝国史研究の現在」『社会科学』50 巻 3 号，2020 年.
吉見義明『草の根のファシズム：日本民衆の戦争体験』岩波書店，2022 年.
林淑美『昭和イデオロギー：思想としての文学』平凡社，2005 年.
早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史　第三巻』早稲田大学出版部，1987 年.
和田春樹『歴史としての野坂参三』平凡社，1996 年.

・二次文献（英語）
Abel, Jonathan. *Redacted: The Archives of Censorship in Transwar Japan*. Berkeley: University of California Press, 2012.
Bardsley, Jan. *Women and Democracy in Cold War Japan*. London: Bloomsbury, 2014.
Byrne, Bridget. *White Lives: The Interplay of 'Race', Class, and Gender in Everyday Life*. London: Routledge, 2006.
Denning, Michael. *The Cultural Front: The Laboring of American Culture in the Twentieth Century*. London: Verso, 1996.
Espiritu, Augusto. "Inter-Imperial Relations, the Pacific, and Asian American History." *Pacific Historical Review* 83, no. 2（2014）.
Espiritu, Yen Le. *Asian American Panethnicity: Bridging Institutions and Identities*. Philadelphia: Temple University Press, 1992.
Fujikane, Candace, and Jonathan Okamura, eds. *Asian Settler Colonialism: From Local Governance to the Habits of Everyday Life in Hawai'i*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2008.
Gabaccia, Donna R., and Vicki L. Ruiz. "Migrations and Destinations: Reflections on the Histories of U.S. Immigrant Women." *Journal of American Ethnic History* 26, no. 1（2006）.

Glickman, Lawrence B. "'Make Lisle the Style': The Politics of Fashion in the Japanese Silk Boycott, 1937–1940." *Journal of Social History* 38, no. 3（2005）.

Goldstein, Robert Justin, ed. *Little 'Red Scares': Anti-Communism and Political Repression in the United States, 1921–1946*. London: Routledge, 2014.

Hayashi, Katie Kaori. *A History of the Rafu Shimpo: Japanese and Their Newspaper in Los Angeles*. Osaka: Union Press, 1997.

Ichioka, Yuji. *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885–1924*. New York: Free Press, 1988.

————. "Japanese Immigrant Nationalism: The Issei and the Sino-Japanese War, 1937–1941." *California History* 69, no. 3（Fall 1990）.

Inouye, Daniel. *Distant Islands: The Japanese American Community in New York City, 1876–1930s*. Louisville: University Press of Colorado, 2018.

Karthikeyan, Hrishi, and Gabriel J. Chin. "Preserving Racial Identity: Population Patterns and the Application of Anti-Miscegenation Statutes to Asian Americans, 1910–1950." *Asian Law Journal* 9, no. 1（2002）.

Koshy, Susan. *Sexual Naturalization: Asian Americans and Miscegenation*. Stanford: Stanford University Press, 2005.

Lai, Him Mark. *Chinese American Transnational Politics*. Urbana: University of Illinois Press, 2010.

Leong, Karen. *The China Mystique: Pearl S. Buck, Anna May Wong, Mayling Soong, and the Transformation of American Orientalism*. Berkeley: University of California Press, 2005.

Lin, Yi-Chun Tricia, and Greg Robinson. "Afterword." In Ayako Ishigaki, *Restless Wave: My Life in Two Worlds, A Memoir*. New York: Feminist Press, 2004.

Matsumoto, Valerie. *City Girls: The Nisei Social World in Los Angeles, 1920–1950*. Oxford: Oxford University Press, 2014.

Matsusaka, Hiroaki. "Border Crossings: Anti-Imperialism and Race-Making in Transpacific Movements, 1910–1951." Ph.D. diss., University of Michigan, 2019.

————. "Cross-Imperial Critique of Border Control: Japanese Socialists' Responses to the US Immigration Act of 1924." In *Documenting Mobility in the Japanese Empire and Beyond*, edited by Takahiro Yamamoto. Singapore: Palgrave Macmillan, 2022.

McDuffie, Erik S. *Sojourning for Freedom: Black Women, American Communism, and the Making of Black Left Feminism*. Durham: Duke University Press, 2011.

Norocel, Ov Cristian. "'Give Us Back Sweden!' A Feminist Reading of the（Re）Interpretations of the Folkhem Conceptual Metaphor in Swedish Radical Right Populist Discourse." *NORA: Nordic Journal of Women's Studies* 21, no. 1（2013）.

Parreñas, Rhacel Salazar, and Lok C. D. Siu. "Introduction: Asian Diasporas: New Conceptions, New Frameworks." In *Asian Diasporas: New Formations, New Conceptions*, edited by Rhacel Salazar Parreñas and Lok C. D. Siu. Stanford: Stanford University Press, 2007.

Purnell, Brian, and Jeanne Theoharis, eds. *The Strange Careers of the Jim Crow North*. New York: New York University Press, 2019.

Robinson, Greg. *The Great Unknown: Japanese American Sketches*. Boulder: University Press of Colorado, 2016.

Sloan, Donald. "'Why Not Revolution?': The John Reed Club and Visual Culture." Ph.D. diss., University of Kansas, 2004.

So, Richard. *Transpacific Community: America, China, and the Rise and Fall of a Cultural Network*. New York: Columbia University Press, 2016.

Spence, Richard B. "John Reed, American Spy?: Reed, American Intelligence and Weston Estes' 1920 Mission to Russia." *American Communist History* 13（2014）.

Takeuchi-Demirci, Aiko. *Contraceptive Diplomacy: Reproductive Politics and Imperial Ambitions in the United States and Japan*. Stanford: Stanford University Press, 2018.

Yoneyama, Lisa. *Cold War Ruins: Transpacific Critique of American Justice and Japanese War Crimes*. Durham: Duke University Press, 2016.

Yoshihara, Mari. *Embracing the East: White Women and American Orientalism*. Oxford: Oxford University Press, 2003.

Wald, Sarah D. *The Nature of California: Race, Citizenship, and Farming since the Dust Bowl*. Seattle: University of Washington Press, 2016.

Wang, ShiPu. *The Other American Moderns: Matsura, Ishigaki, Noda, Hayakawa*. University Park: Pennsylvania State University Press, 2017.

Wu, Judy Tzu-Chun. *Radicals on the Road: Internationalism, Orientalism, and Feminism during the Vietnam Era*. Ithaca: Cornell University Press, 2013.